

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号： 22604

研究種目： 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間： 2018～2022

課題番号： 17KK0029

研究課題名（和文）コーカサス出身者の汎ユーラシア活動に関する歴史的研究 新たな境域研究構築に向けて

研究課題名（英文）Studies on the Pan-Eurasian Historical Activities of the Peoples of the
Caucasus: Towards the Constuction of New Research Agenda on the Frontier Studies

研究代表者

前田 弘毅（Maeda, Hirotake）

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：90374701

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,200,000円

渡航期間： 13ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究では、ジョージア・イリア国立大学とアメリカ・プリンストン大学への長期滞在により、コーカサス現地における史料収集と分析および国際的な研究ネットワークの構築を行った。欧米の最新の境域・アイデンティティ研究の応用により、ユーラシアにおけるコーカサス出身者の歴史的活動と、境域地域としてのコーカサスの歴史的特徴を検討し、中央ユーラシア社会の近代化の孕んだ矛盾や現在中東地域で顕在化している国家と宗教マイノリティの複雑な関係力学の歴史の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、帝国とマイノリティおよび帝国中心と辺境地域の関係を、支配・被支配の一方的視座からみるのではなく、様々な政治文化や政治体・言語や宗教からなる諸帝国をつなぐ存在として捉え直した。多言語史料を検討した結果、彼らが知の伝達者となり、異文化間接触で積極的な役割を果たすと同時に、支配空間秩序再編でも積極的にその過程に加わり、帝国秩序を形成する側にも、また時には破壊する側にも立つなど、両義的な役割を果たしていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study conceptualizes the Caucasus region as a contact zone that historically bridged multi-layered and cross-cultural contacts. By using local sources in different languages, the practices of multiple identity were analyzed. It also aims to build a research network on Caucasus studies through active cooperation with relevant researchers in Georgia, USA and other places. It revealed that the frontier identity played a crucial role in the process of ethno-national formation, especially in the modern age of the relevant societies.

研究分野： 歴史学

キーワード： コーカサス ジョージア/グルジア アルメニア ロシア・イラン・中東 境域 ミドルマン 奴隷軍人 帝国

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

基課題「逆説」のミドルマン - コーカサス総督府通訳官と「オリエント」 - は、19世紀前半におけるロシア帝国統治下のコーカサス(カフカース)総督府に仕えた通訳官の活動を、近世・近代という時代性、ヒトとモノの交流史、帝国秩序と境域の関係史及び知的空間形成という主に3つの枠組みから検討し、境を超える人びととしてのその役割の究明を目指すことにある。本研究課題「コーカサス出身者の汎ユーラシア活動に関する歴史的研究 新たな境域研究構築に向けて」(以下、ユーラシア境域史の構築)は、長期にわたる現地滞在によって、基課題の成果を確保し、さらに近世から近代にかけての境域としてのコーカサス地域の特性を追究する研究ネットワークの構築と拡充をはかるため、以下の二つの研究戦略上の広がりを目指すことを意図している。

2. 研究の目的

本科研の課題は第一にコーカサス現地における現地の歴史学の成果のさらなる吸収である。特に、1995年の現地研究滞在以来、20年にわたって探究してきたジョージア/グルジアとイラン関係史について現地の最新の研究状況の知見を深めて、若手研究者との研究ネットワークを構築することを目的とする。グルジア語史料の読解能力をさらに向上させ、そしてグルジア人の歴史的活動を広くユーラシア史の文脈で位置づけるための研究史上の整理を行う。さらに、中世アルメニア・イラン関係史の第一人者であり、2013年に日本に招聘したハイラペト・マルガリャン教授(イエレヴァン大学)など、ジョージア/グルジアに留まらず、コーカサス現地の歴史研究者とのネットワークの拡充を図る。

本科研によるもう一つの目標は、こうした具体的な研究に加えて、より大きな理論的枠組みを構築することにある。研究代表者は過去20年にわたって、中東イスラーム史およびユーラシア史研究において発展してきたネットワーク論のマイノリティ・境域出身者に対する適応を検討し、さらに国を跨いだ人の移動史(いわゆる跨境論、トランスボーダー・ヒストリー)に位置づけてきた。本科研においては、ネットワーク論、跨境論をもう一步理論的に進めて、「境を常に作りかえていく」主体としての境域出身者の歴史構築研究への道を拓く。

ユーラシア史において諸帝国間のミドルグラウンドあるいは容易に征服されないフロンティアとして存在し続けた(続けている)コーカサスの住民は、地域を包摂しようとする帝国権力の干渉に対して、家族・民族・宗教ネットワークをもってすり抜けようとし、さらにサファヴィー朝に見られたように、自らが帝国権力の中核を担う存在に転じることで、中央宮廷内のパワーバランスなど帝国権力の支配空間秩序の再編過程に積極的に参画していった。このように、支配エリートとして帝国の輪郭をつくる一方で、最終的にはロシアやオスマン帝国など他の帝国・地域主体・宗教集団とも接触することで、帝国を破壊する立場にも転じた。

コーカサスという地域の宗教・言語・民族的多重性は、帝国に取り込まれる際にも、帝国を破壊する際にも、大きな歴史的意味を持ったのである。新しい境域研究を拓くに当たって、これまで密接な協力関係を構築してきたアメリカ・プリンストン大学近東学科において共同研究に従事する。中東研究で著名なプリンストン大学は関連史資料を豊富に所蔵している。さらにヨーロッパの境域として「現地」の包摂の歴史を踏まえて発展したアメリカにおいて、1990年代以降、混血者などミドルマンに関する研究は新たな展開と深化を見せており、理論と実証研究両面において理想的な研究期間である。

3. 研究の方法

ジョージア長期滞在により、グルジア語・アルメニア語・ペルシア語・ロシア語史料の読解スキルを向上させ、将来にわたって実証面での歴史研究者としての地位を確保する。さらにソ連時代の境の内側に閉じこもったナショナル史学の上に新たな領域的・空間的上塗りを始めつつある現地の若手研究者とのネットワークを構築して将来にわたる研究協力関係を担保する。アメリカにおいては、プリンストン大学において、境域研究としてのコーカサス地域研究と、同地域出身者の境を作り替えていく活動について新たな理論的枠組みの構築を図る。この切り口を広げてコーカサス現地だけではなく、より広くユーラシア全域にわたるコーカサス出身者の活動を追う。基課題の通訳官の家系研究はこの広い文脈の中でパイロット研究となる。

4. 研究成果

本研究の成果として、ジョージア/グルジアとアメリカにおける長期の研究滞在、欧米などでの英文による業績の公刊、国内での出版および啓蒙活動を挙げることができる。

まず、国際的な研究ネットワーク構築に向けて、ジョージア・イリア大学での主に5ヶ月および、アメリカ・プリンストン大学における6ヶ月近い長期滞在を行うことができた。この間、ジョージアでの学会での数多くの報告をはじめ、海外での発表と史資料の収集および研究者との意見交換を行い、さらに中央ユーラシアから中東の心臓部であるパレスチナ地方、そして、エーゲ海・東欧地域にまでまたがる中央ユーラシア史研究の更なる深化に向けて研究を遂行した。こ

のほか、ジョージア/グルジア人若手研究者と共同で複数回の研究発表を行った。これは、サファヴィー帝国支配下のグルジアの貴族がオスマン帝国支配下のギリシア教聖地に寄贈したギリシア語福音書に含まれるグルジア語テキストについて解析を行ったものである。また、17世紀の政治家・歴史家パルサダン・ゴルギジャニゼや、19世紀の政治家・歴史家アレクサンドレ・オルベリアニが執筆した史料について研究を進めた。

プリンストン大学では、史資料収集及び研究者との交流に努めた。近東学部主催のセミナーの他にも、歴史学部やヘレニズム学部、考古学部、高等研究所などが主催するセミナーやシンポジウムに参加することで、世界各地の歴史研究と境域史研究の潮流の理解に努めた。折しもイラン・イスラーム革命40周年関連の学術報告会が多数開催されたプリンストン大学イラン・湾岸研究センターでも貴重な学術交流の機会を多数得た。他にも、ポーランドやスロヴァキアなどいわゆる中東欧から、中華人民共和国内モンゴル自治区まで現地調査を行い、遊牧世界と農耕民の世界の境域であるいわゆる農牧接壤地域の歴史的環境と生活形態に関する知見を得ることができた。2019年3月に行ったイラン・フーズスターン地方への現地調査により、これまでほとんど知られてこなかったジョージア/グルジア系ディアスポラのイランにおける複雑な歴史的活動の一端を明らかにすることができた。

海外における成果として、700頁をこえる大著である *The Safavid World* (Routledge Worlds)(Matthee, Rudi ed.) に論文 *Against All Odds: The Safavids And The Georgians* を寄稿した。この中で2世紀以上にわたるサファヴィー帝国とジョージア/グルジア人政治勢力の関係について考察した。コーカサス出身者の周辺帝国における活動を総合的に俯瞰しようとする本科研の主たる成果である。コーカサス出身者の歴史的経験はユーラシア大陸を広く覆うものであった。アフシャール帝国の創設者ナーディル・シャーとの会話を老年のエレクレ二世が家族に話し、やがて孫のアレクサンドレ・オルベリアニがこれを書き残した史料を現地の学会で取り上げた。イランにおけるジョージア/グルジア出身者の複合的なアイデンティティのあり方や政治性についても研究を重ね、有力なグルジア出身官人家系についてイランで著作を出版した。2008年にもジョージア/グルジアで単著として刊行されており、いわば「二つの母国」でともに現地語で出版されたことになる。このように、言語・宗教をこえた活動を繰り広げた越境エリートの歴史の考察を進めた。

日本でも、近世から近現代におけるコーカサス研究をまとめることができた(『中央ユーラシア研究入門』収録の解説論考「コーカサス」)。この中では、狭義の歴史学研究成果のみならず、現代中東政治史に詳しいジョージアやアメリカにおける研究協力者の知見も取り入れることで、地域史を広く考える論考の執筆が可能になった。サファヴィー帝国第5代シャー・アッパース一世に関する評伝『アッパース一世』(山川出版社)を上梓し、その「改革」と時代性について全体像を提示した。この中ではジョージア/グルジア人だけではなく、アルメニア人商人の取り込みについても触れた。また、ソ連崩壊のコーカサス現地の政治変化について、研究報告やウェブメディアへの寄稿も積極的に行った。また、市民向け講座でジョージア/グルジアの歴史について解説するなど、成果の社会還元にも取り組んだ。

以上のように、コーカサス研究および境域世界史の研究を先導する中核研究者として欧米の学会に発信すると同時に、コーカサス現地でもベテランと次世代の研究者をつなぐ役割を果たすことに努めた。コーカサス出身者が周辺地域との接触の中で作り替えてきた「境」=アイデンティティについて、現地や欧米の研究者と問題意識を共有し、コーカサス境域研究を中核とするユーラシア史研究の構築に努めた。コーカサス現地内部においても、欧米における境域研究においても、その両者を日本の研究者が結ぶことにより、文字通り汎ユーラシア的効果が期待できる。さらに、将来的な日本のユーラシア史研究者の育成にも寄与できると考える。イラン、トルコ、ロシアの境域であり、地中海・環黒海地域とユーラシア・ステップ、さらに中東文明の狭間にあるコーカサス地域への知見を共有することで、本研究により、ユーラシア境域研究の理論的構築を図り、将来的に国際的なユーラシア史・コーカサス史の共同研究を担うためネットワーク構築の成果を挙げたと考える。

本研究において、コーカサス現地における実証史学と、アメリカにおける境域研究の深化をはかったが、ジョージア/グルジア、アルメニアというユーラシア史においてきわめて重要な境域地域における20世紀史学の遺産の吸収と、新たな歴史学研究の促進・若手研究者の育成による研究還元をコーカサスの現地において将来にわたって行うための道を拓くことができた。さらに欧米の学会に対しては、周辺世界と接続し、広がり、周辺地域を特に包摂していく新たな境域としての「常に境をつくりかえていく」いわば動く境域史としてのコーカサス史研究の枠組みを提示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 前田弘毅	4. 巻 64
2. 論文標題 ジョージア 4人の指導者に率いられた30年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユーラシア研究	6. 最初と最後の頁 17-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田弘毅	4. 巻 15
2. 論文標題 特集にあたって：武を担った人びとの「ユーラシア的展開」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 メトロポリタン史学	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田弘毅	4. 巻 58
2. 論文標題 正教聖地アトス調査行（2017年4月）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ユーラシア研究	6. 最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 Vakhushti Khan and Georgians in Khuzestan
3. 学会等名 International Webinar HISTORY OF GEORGIANS IN KHUZESTAN（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前田弘毅
2. 発表標題 二つのすれ違いと矛盾の地 コーカサス・戦争と平和の30年
3. 学会等名 第33回ユーラシア研究所総合シンポジウム『ソ連解体後の30年』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 A Note of Aleksandre Orbeliani on Kng Erekle II and Nadir Shah
3. 学会等名 International Conference Archival Studies, Source Studies; Trends and Challenges (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 A Date on the Ascension of King Teimuraz I and its Surroundings from the Description of Tarikh-e 'Abbasi
3. 学会等名 International Conference The Middle East and Caucasus. Culture, History, Politics (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tamar Lekveishvili and Hirotake Maeda
2. 発表標題 Information about Georgia in Fazli Beg Khuzani Isfahani 's Work
3. 学会等名 International Conference East and West: Linguistic, Cultural, Historical Interactions (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hirotake Maeda
2. 発表標題 Studies on the Georgian-Safavid Relations on the Basis ofFazli ' s Information: How Giorgi Saakadze defected to the Safavid court?
3. 学会等名 International Conference The Georgian Manuscript Heritage, National Center of Manuscripts (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hirotake Maeda and Okropiri Jikuri
2. 発表標題 Georgian-Greek Colophons, Added to the Greek Four Gospels, as well as Bilingual Inscriptions of the Plated Covers and Miniatures ' Georgian Inscriptions, preserved in Athos Karakalou Monastery Library
3. 学会等名 International Conference Archival and Source Studies Trends and Challenges, National Archive of Georgia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hirotake Maeda and Okropiri Jikuri
2. 発表標題 Newfound Greek Gospel on Mt. Athos copied by Ashotan II Bagration's commission
3. 学会等名 International Kartvelological Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hirotake Maeda and Okropiri Jikuri
2. 発表標題 Georgian Antiquities from Karakallou Monastery (Mount Athos)
3. 学会等名 The 16th Annual International Kartvelological Conference in Memory of St. Grigol Peradze (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 前田 弘毅	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 104
3. 書名 アッパース1世	

1. 著者名 Rudi Matthee	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 766
3. 書名 The Safavid World (Routledge Worlds)	

1. 著者名 Buba Kudava and others (eds.) (Hirotake Maeda and Marina Aleksidze 分担執筆)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Artanuji (Tbilisi)	5. 総ページ数 822
3. 書名 Istoriani (“Some New Information on the Lives of Queen Ketevan” 278-286分担執筆)	

1. 著者名 前田弘毅	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 420
3. 書名 小松久男・荒川正晴・岡洋樹編『中央ユーラシア史研究入門』（「コーカサス」251-258担当）	

1. 著者名 Hirotake Maeda	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 258
3. 書名 Abbas Amanat and Assef Ashraf eds., The Persianate World: Rethinking a Shared Sphere ("Lives of Enikolopians" 169-195担当)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Exploring the Georgian and Caucasian World https://www.hmaeda-tmu.com/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	サニキゼ (Sanikidze Giorgi)	イリア国立大学・Institute of Oriental Studies・Director	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	レイノルズ (Reynolds Michael)	プリンストン大学・Department of Near Eastern Studies・Associate Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ジョージア	イリア大学			
アメリカ合衆国	プリンストン大学			
ジョージア	イリア大学			
アメリカ合衆国	プリンストン大学			